

## 天文方の蘭学事始

吉田 忠

天文方は、寛政や天保の改暦にあたつて、西洋天文学を基礎に、あるいは西洋天文学書を参考に、行つたとしばしば言われてきている。しかし、この表現は、寛政の改暦の場合に関しては、留保条件をつけておかねばならない。というのも、寛政の改暦については、西洋天文学ないしは西洋天文学書というのは、中国に入つたイエズス会士の著訳書またはそこに記された天文学を指しているからである。寛政の改暦の特色は、『曆象考成後編』に説かれるケプラーの楕円軌道論を日月の運動に適用しているところにある。それ故、その起源という意味では、西洋天文学であり、西洋天文学書で間違いない。だがこれらは、イエズス会士の手になる著述であつて、蘭書ではないことに留意すべきである。

蘭書による西洋天文学の知識を活用した改暦の始まりは、天保の改暦である。これは高橋至時の有名なラランデ曆書の翻訳・研究に端を発している。したがつて、天文方の蘭学事始は、寛政改暦前後から天保改暦への間ということになる。

では天文方はいつ、どういう経緯を経て蘭書にアプローチしたのだろうか。その経過を具体的に示す資料は、至時の次男渋川景佑（渋川家に養子に入つた）の『新修五星法』巻1（内閣文庫蔵）の付言にある。

それによると、至時が参照した蘭書とその年代とは次のとおり

である。

寛政二（1790）和蘭曆法（未詳）

六（1794）烏軒思可勒（*Algemeene Oefenschool van Kunsten en Wetenschappen*, Amsterdam, 1763-70, 3 dln.）

十二（1800）陪斯（Egbert Buijs, *Nieuw en Volkomen Woordenboek van Kunsten en Wetenschappen* Amsterdam, 1769-78）

瑪爾丁（Benjamin Martin, *Filosofische Onderwijzer*, Amsterdam, 1744）

魯羅佛（Johann Lulofs, *Inleiding tot eene Natuur-en Wiskundige Beschouwing des Aardkloofs*, 1750）

しかし至時は、寛政十二年当時はまた橋本宗吉や前野蘭化らに蘭書を読んでもらう段階で、本格的にこれを修得したのは、ラランデ曆書と取り組んだ享和三年（1803）と言つてよからう。それ故、天文方の蘭学事始は、『解体新書』翻訳（1774）に比べると、約三〇年程おかれていたといえよう。（なお詳細は拙稿「天文方の蘭学事始」『日蘭学会会誌』一一卷二号、一九八七年三月を参照願えれば幸いである。）」